

短期語学研修プログラムにおける日本人学部生の 留学生サポートの実践

鈴木 美穂

(外国語学部日本語・日本語教育学科)

The Dynamics of Intercultural Exchange Between International and Japanese University Students During a Short Term Japanese Study Program

Miho SUZUKI

(Department of Japanese and Japanese Language Education, Faculty of Foreign Language Studies)

本学で実施されている短期語学研修「日本語日本文化研修（以下 JALC）」は、日本語学習だけでなく異文化体験や異文化交流に根ざす実践活動も多い。参加留学生からは、特に、本学日本人学部生と もっと交流したいという声が多く、同世代の日本人学生と接することは非常に貴重な体験であることがうかがえる。このような研修は、留学生と日本人学部生のさらなる異文化交流の場となるのではないかと考え、プログラムの見直しをはかった。

2017 年度は、本学国際交流センターに所属する「留学生サポートチーム next」の学生が授業や活動など研修全体のサポートとして参加することになり、留学生、日本人学部生双方が今まで以上に交流をすることが可能となった。

本稿では 2018 年度日本語教育国際研究大会で行った口頭発表をもとに、短期研修における日本人学部生のサポート参加に関する実践報告とともに、アンケートなどから日本人学部生がどのような形で研修に関わり、異文化交流や異文化理解をはかることができたか調査、考察する。

キーワード：(5～7 語)：日本語教育、短期語学研修、短期留学、異文化交流、異文化理解

はじめに

多くの大学でさまざまな形の短期留学プログラムが行われている。大学で行われている短期留学プログラムの特徴のひとつとして、留学生と同世代の日本人学部生が交流する機会がある、ということが挙げられる。本学で行われている短期研修でも、日本人学部生は交流会の他に留学生のサポートとして研修に参加している。しかし、このプログラムはあくまでも留学生の研修であるため、参加している日本人学部生の支援や対応方法については、あまり重きをおいていない現状がある。本実践報告では、短期

研修のサポートに参加する日本人学部生（以下サポート学生）のためにどのような支援が必要か、効果的な異文化交流を行うためにどのようなことを実践したかについて報告する。

1. JALC 概要

本学で行われている短期語学研修「日本語日本文化研修」は年 1 回、2 月に 2 週間程度行われている。年によって異なるが、研修に参加する留学生は、中国、韓国、台湾など、主に本学提携校からの学生、10 名～20 名程度である。参加者の日本語力は基本

的には初級修了程度が条件で、午前午後のカリキュラム共にすべて日本語で行われている。

研修の目的は、異文化交流、異文化理解、コミュニケーションを中心とした以下の項目となっており、本学留学生別科の教員が授業を担当し、指導にあたっている（鈴木 2015）。

- ①日本語、日本文化の学習を通じてコミュニケーション能力を高める。
- ②日本語や日本文化に直接触れ、日本への造詣を深める。
- ③日本人、他国の参加者と日本語でのコミュニケーションを通じて交流を深め、自国について考え、世界へと視野を向ける。

JALCは教室での語学学習だけでなく日本語を使つての実践活動が多いことが特徴である。午前の日本語授業は60分×2コマで、様々なトピックをモジュール形式で取り上げており、トピックについて話し合ったり、グループワークをしたり、留学生同士が日本語でコミュニケーションできる授業となっている。午後の教室外活動では体験を通してさまざまな日本文化を学ぶ。午前に「食文化とマナー」-午後「煎茶道体験」、「日本のファッション」-「染物体験」のように、午前と午後でトピックにつながりを持たせており（表1）、午前の授業で学んだことを活かして午後の活動に取り組めるプログラムとなっている。サポート学生は、主に午後の交流会や、教室外活動の引率サポートなど限られた時間で参加

していた。

2. サポート学生に関する問題点

このサポート学生に関して、研修後、さまざまなところからさまざまな声があがっていた。留学生からは、「学部生に積極的に参加してほしい」という声、教員からは「サポート学生と留学生のコミュニケーションが取れていない」という声、参加したサポート学生からは「先生にもっと留学生と話すように言われた」「何をしたいかわからない」という声である。研修について理解していないサポート学生もおり、当日の急な欠席や、遅刻などもあり、サポートや交流がうまく機能していたとは言えない状況もあった。

(1) 研修後アンケートの見直し

交流の機会があるにもかかわらず、それが生かされていないという現状の問題の所在を明らかにするため、研修後のアンケートを見直した。

2016年度JALCの研修後のアンケート（表2）では、留学生は交流会に非常に満足をしているものの（Q1）、Q2「改善した方がいい点」では「交流時間の不足」「サポート学生の積極性」などに言及しており、交流の方法の見直しが必要だということがわかった。

担当教員の「サポート学生について」の記述では「留学生と話してくださいと指示をしても日本人同

表1

	午前：日本語授業 (60分×2コマ)	午後：教室外活動 (120分～180分)
1日目	おすすめの観光地と名物	明治神宮、原宿散策
2日目	大学生事情	日本人学部生との交流
3日目	食文化とマナー	煎茶道体験
4日目	大切な日に一贈り物	浅草、スカイツリー
5日目	日本のファッション	染物体験（落合二葉苑）

表2 2016年度研修後調査

対象	実施
	2016年度JALC終了後（2017年2月10日）
留学生：15名	Q1目白大学学生との交流はどうでしたか。→面白かった：100% Q2授業について改善した方がいい点（記述）
教員：10名	・サポート学生について（記述）

士で話をしている、留学生とコミュニケーションが取れていない」「引率をお願いしても日本人学生同士でかたまってしまってサポートができていない」「せっかくの交流の機会をつぶしている」「必要ないのではないか」という厳しい意見が出ており、教員の対応、交流の方法、サポートの内容を改めて考えなければならなかった。サポート学生に関しては、研修後のアンケートを取ることができていなかったため、まずサポートに参加する学生の意見や考えを聞く必要があると感じた。

(2) 事前調査

積極的にサポートや交流に参加できるようにするためには、何が必要か、JALCのサポートの参加希望者に事前にアンケートを行い、サポートや交流に関して不安なこと、難しいことなどを調査した(表3)。本稿ではアンケートの中で特に注視したい項目(Q3、Q5、Q6)についての結果と考察を行う。Q3「サポートで心配なことはありますか」という質問では、全体的に心配だと感じている学生が多く(71%)、心配な理由として「言葉」や「自分自身の知識量が少ない」というコメントがあった。Q5「交流で難しいと感じることは何ですか」という質問では「相手の気持ちを読み取る、伝える」「言葉の表現が違うとき」などのコミュニケーションに関する記述が目立ち、「交流やサポートをしたいがコミュニケーションに不安がある」という学部生が多いことがわかった。この不安を取り除くためにはどのような参加の仕方がコミュニケーションのために有効か考える必要があった。前回のJALCに参加したサポート学生のインタビューでは「短時間の参加で

は留学生と仲良くなるのが難しかった」という意見もあった。180分程度のサポートでは、名前や顔も覚えられず、親しくなることが難しかったとコメントしていた。また、「一人で複数の留学生と話したり対応したりすることが難しい」と話しており、「一人では親しくない相手、日本語があまり上手ではない相手と会話を続けるのが難しい」というのがその理由だった。担当教員から「サポート学生が交流できていない」「日本人同士で話してしまう」という意見があったのも、これらのことが原因だったといえよう。留学生とサポート学生が良い関係を作ることができるサポート方法を考えなければならなかった。Q6「サポート学生が教員に求める対応」では「サポートでわからないことがあったらすぐ対応してほしい」という記述が多く、「サポートの内容を詳しく説明してほしい」、「留学生が困った時の対処法をあらかじめ教えてほしい」などがあった。何を、どのようにすればいいか、あらかじめ詳しく知っておきたいと考えていることがわかった。今までのプログラム運営ではサポート学生に対する事前の説明が不十分だったということも考えられ、事前説明や支援の方法、教員のサポート学生への対応方法などを見直す必要があった。

3. サポート方法の改定

留学生、教員、サポート学生の調査から、運営者はサポート学生や担当教員に対してそれぞれ事前準備や支援が必要だということがわかり、サポート方法の改定を行った(表4)。なお、研修内容の変更

表3 事前調査 質問項目

時期	JALP 実施前 (2017 年 12 月～2018 年 1 月)
対象	サポート参加予定 日本人学部生 7 名
内容	Q1. JALC に参加しようと思った理由は何ですか。(記述) Q2. JALC のサポートで一番やりたいことは何ですか。(記述) Q3. JALC のサポートで心配なことはありますか。(記述) →はい：71%・いいえ：29% ・はい(理由)→記述 Q4. 留学生と交流する時に、おもしろい、楽しいと感じることは何ですか。(記述) Q5. 留学生と交流する時に、難しいことは何だと思いますか。(記述) Q6. 留学生のサポートする際に、担当の先生やスタッフから、どんな手伝いや対応があったらいいと思いますか。(記述)
方法	記述、選択、インタビュー

表4 サポートの改定

	～2016年度	2017年度
参加者	学内募集	学内留学生サポートグループ next の学生
サポート時間	午後の課外活動 (1回)	午前の授業+午後の課外授業 (複数回)
人数	1日2名程度	1日4名程度
説明会	当日	研修前 (複数回)、当日
教員の対応	当日説明	研修前に打ち合わせ

はしなかった。

(1) サポート参加者

2017年度の新プログラムでは学内全体へのサポート参加者の募集をせず、試験的に本学国際交流センター所属団体の「留学生サポートチーム next (以下 next)」の学生に研修全体のサポートをしてもらうことになった。その理由として、nextは本学の交換留学生のサポートを行っているグループのため、留学生の対応に慣れている学生が多いこと、定期的にミーティングを行っており、打ち合わせや説明会などをしやすかったこと、国際交流センター所属のため教職員とも連携がとりやすいこと、また同センター内の予算で運営されていることがあげられる。

(2) サポートの時間と人数の改定

新プログラムでは、留学生とサポート学生が関わる時間を増やすことに重点を置いた。今までのプログラムでは午後の教室外活動の2時間程度の参加であったが、新プログラムでは留学生と共に午前の教室の授業から参加し、午後と一緒に教室外活動を行うという形で1日行動を共にしてサポートを行うことにした。このサポートは1日だけではなく数日参加する学生もいた。そして、1日の授業や課外活動に参加するサポート学生の数を増やした。今まではサポート学生1人で1つのグループのサポートに入る形だったが、改定後はサポート学生2名程度で1つのグループをサポートできるようになった。さらに、あらかじめ担当するグループを決めておき、当日にサポートがスムーズに行えるように工夫した。

(3) 事前説明

新プログラムでは、参加するサポート学生に対して事前に全体説明会を行い、JALCの目的や、どんなことが行われるのかを伝えた。次に担当日ごとに

打ち合わせを行い、各授業や教室外活動ではどのようなサポートが必要か説明をした。さらに、授業当日も、授業前に担当教員とサポート学生の顔合わせの時間を設け、一日の流れ、サポート内容などを確認した。担当する教員に対してもサポート学生について事前に説明を行い、サポート学生が不安に思っていることなども伝え、対応方法や指示方法を確認した。授業前、研修中のサポート学生への説明と指示をお願いし、サポート学生も留学生と同様に授業に参加しているというようなイメージで授業や活動を進めてほしいとお願いした。

4. 2017年度 JALC 実施と事後アンケート

2017年度 JALC は2018年1月30日から2月10日まで実施された。サポート学生、留学生、教員それぞれに新プログラムのサポートに関する研修後アンケートを行い、分析をした(表5)。

(1) サポート学生のアンケート

まず、サポート当日の授業前に担当教員と顔合わせと打ち合わせを行ったことに関するQ1「サポート当日の事前説明はわかりやすかったですか」という質問では、すべての学生が「分かりやすかった」と答えていた。授業の内容確認、教員との連携がスムーズに行われたことがうかがえる。サポート内容(Q2)としては「日本語の説明」「誘導」「体験活動」「写真撮影」が多く挙げられていたが、Q3「サポートでうまくできたことは何ですか」という質問では「コミュニケーション」に関する記述が最も多く、次に「日本語のサポート」に関するものが多かった。「長い時間一緒にいたことで、仲良くなれた」「コミュニケーションしやすかった」という意見や、「前回の JALC に比べ、交流が十分にできた、

表5 研修後アンケート

	質問項目
①サポート学生：10名	Q1 サポートの説明はわかりやすかったですか Q2 授業ではどのようなサポートや活動をしましたか Q3 サポートでうまくできたことは何ですか Q4 サポートで大変だったことは何ですか Q5 午前の授業のサポートは必要だと思いますか →はい：90%・いいえ：10%
②留学生：9名	Q1 サポート学生の話す日本語は理解できましたか Q2 サポート学生の支援は日本語学習の役に立ちましたか Q3 サポート学生との交流に満足しましたか Q4 サポート学生にどんなことを手伝ってもらいましたか Q5 交流でしてみたいことや必要な支援はありますか
③教員：9名	Q1 サポート学生は必要ですか Q2 サポート学生に求めるものは何ですか

ちゃんと交流ができたので留学生との間に気まずさがなくなり、スムーズにサポートができた」「留学生参加者が少なかったので深く交流できた」というコメントもあった。全体的に「交流ができて楽しかった」という感想が多くみられた。サポート学生と留学生は関わる時間を長くすることによって親しくなり、よりよい関係を作ることができたことがわかる。研修後も SNS などを通じてやり取りを続けており、お互いの研究のアンケート調査なども協力し合っているようだ。今回の研修の学生を見ると、前回までの JALC とは異なり、お互いにとても仲良く楽しそうに行動していた印象があったが、サポート学生もそのことを実感していたことがうかがえる。Q4「サポートで大変だったことは何ですか」では、授業で取り上げられていた文化についての説明に関するものが一番多く、次に日本語のサポートに関するものが多かった。「日本のことを伝える、説明することが難しい」「日本のことがよくわからないから勉強しようと思った」など日本に関することをうまく説明できなかつたり答えられなかつたりしたことがあったようだ。研修のサポートを通して自国の文化について改めて考える機会になったのではないだろうか。また、「事前に講習会のようなものがほしかった」という記述もあり、前もって授業の内容をまとめたものをサポート学生に渡す必要があるのではな

いかと感じた。

「日本語のサポート」に関しては、「大変だった」、「うまくできた」どちらの感想も多くみられた。「うまくできた」と感じたサポート学生は「正しい日本語を教えること」「教師の日本語が分からない際のサポート」ができたと感じていた。一方、「大変だった」と感じた学生は「伝わらない日本語があった」「言葉の説明」などを「大変だった」と感じていた。いずれにしても留学生と話す時は普段話す日本語ではなく、工夫して日本語を話すように心がけていたことがうかがえる。「言葉が通じない時、どのように伝えればいいのか考えることができ、今後の留学生サポートに役立つと思った」というコメントもあった。今後の留学生サポートや異文化交流をする際の参考になったのではないかと考えられる。

最後に、今回新しく取り入れた午前の授業のサポートが今後必要かどうか質問した (Q5)。ほとんどの学生が午前のサポートが必要だと答えていた。その理由として「日本人学生も勉強できる」「長い時間を過ごすことができるため仲良くなれる、たくさんコミュニケーションが取れる」「午前の授業で学んだ内容を午後の授業で体験するから、理解が深まり教えやすい、話しのネタになるから」等のコメントがあげられていた。午前の授業のサポートは、留学生のためではなく、サポート学生自身のために

必要だと考えている学生がほとんどだったということに驚いた。「参加する必要はない」と答えた学生(1名)は「あまり頼られることもなく、留学生だけでやっていけそうだった」という留学生の立場から答えていた。

(2) 留学生のアンケート

Q1「サポート学生の話す日本語は理解できましたか」ではすべての留学生が「理解できた」と答えており、Q2「サポート学生の支援は日本語学習の役に立ちましたか」という質問でも全ての留学生が「役に立った」と答えていた。サポート学生が工夫して日本語のサポートをしていたことがこの結果につながっていると考えられる。サポートの内容(Q4)は「わからない言葉を教えてくれた」「わからないことや知りたいことを説明してくれた」という答えが多かった。また、すべての留学生が「サポート学生との交流に満足している」(Q3)と答えおり、サポート、交流ともに新プログラムが有効だったということがわかる。

(3) 教員のアンケート

Q1「サポート学生は必要ですか」では指導にあたった全ての教員が「サポート学生が必要だ」と答えていた。理由として「日本語がおぼつかない学生のフォローのため」「教師の指示の補足のため」「同じ学生であるため、話しやすい、日本語で会話ができる」「グループワークのサポートをしてもらえた」などが挙げられていた。授業中、留学生が教員の指示がよくわからない時は、教員に再度たずねるのではなく、サポート学生に質問する留学生が目立ったという感想を教員から多く聞いた。留学生は、教員よりサポート学生の方が質問しやすかったようだ。わからないことをそのままにせず、サポート学生に質問などをすることで授業内容の理解が進んだのではないかと考えられる。Q2「サポート学生に求めるものは何ですか」では、今回のサポート学生のような「留学生のことを留学生の立場から考えられるサポーターを希望する」というコメントもあり、サポート学生に対する高い評価が目立った。このことから、教員にとってもサポートが効果的に機能していたことがわかる。

5. まとめ

今回の研修を通して、サポート学生の参加を効果的なものにするための支援には以下の点が必要だということがわかった。まず、サポート学生の立場になって考えることである。日本人学部生に事前アンケートやインタビューをしてみると、運営側が「たいしたことないだろう」と思っていることを実は不安に感じていることがわかってきた。できること、できないことをあらかじめ聞き、サポート学生の不安を取り除き、ストレスなくサポートできるような支援をする必要があると感じた。異文化交流、異文化理解というと、大きく構えてしまいがちだが、留学生も、学部生ももっとお互いにシンプルに「仲良くなりたい」という気持ちからはじまっている。より良い関係を作るためにはどうしたらいいのか、関わる時間を増やしたり、サポート学生の人数を増やしたり、ちょっとした工夫でお互いがより親しくなれることがわかった。次に、サポート学生だけでなく教員にも「何を、どのように」を丁寧に伝えることである。言わなくてもわかるだろう、という考えは捨て、些細なことでも丁寧に時間をとって説明することが研修を滞りなく進めるカギとなることがわかった。最後に、留学生、サポート学生どちらにとっても異文化理解となるような活動や研修を提供することである。研修を通して日本文化を知ることとは、留学生はもちろん、日本人学生にとっても自国を知る良い機会になっている。教室外活動の引率だけでなく、午前の授業にも参加することで、日本人学部生も自国について、留学生の国について知ることができる。このように留学生、サポート学生どちらにとっても異文化理解が深まるような授業、サポート、活動を取り入れていきたい。午前、午後を通しての一日サポートや、教員との連携、異文化理解や異文化交流はサポート学生にとっても短期研修でしか経験できない活動だといえる。サポート参加をした学生の実践報告を行う機会や、経験を生かした交流を持つ機会を与えることができれば、他の学生の異文化理解や異文化交流の助けになるのではないかと考える。

それぞれの立場からの意見を聞き、それを反映した小さな工夫や改定で、プログラムに関わる日本人

学部生、留学生、教員すべてがストレスなく研修に参加することができた。今後はサポート学生の人数を増やし、学内の異文化交流や異文化理解の機会を広げていきたい。同じ場所、時間、学習を共有することで、留学生、日本人学部生双方が効果的に異文化交流、異文化理解できる研修にしていくことが運営側の役割だと考える。

《謝辞》

多忙な業務の中、JALC の研修実施、アンケートの取りまとめ等に尽力して下さった国際交流課の方々、日本語教育センターの先生方に感謝の意を表したい。

《参考文献》

鈴木美穂（2015）「留学生の語学留学に対する意識について ―日本語日本文化研修（JALC）から見えたこと―」, 『目白大学高等教育研究』, 第 21 号, pp.83-88.

(受付日：2018年10月29日、受理日2018年12月10日)

